

民俗学における日記研究の 展開とその可能性

The Development of Diary Research in Folkloristics and Its Potential

川村清志・小池淳一

KAWAMURA Kiyoshi and KOIKE Jun'ichi

はじめに

- ①被支配者層の日記資料への関心と資料化
- ②日記資料の民俗学的な利用
- ③他の研究分野における日記研究の広がり
- ④民俗学における日記研究の可能性
- ⑤日記研究の可能性と限界

おわりに

【論文要旨】

本稿は、民俗学における日記資料に基づく研究成果を概観し、その位置づけを再考することを目的とする。民俗学による日記資料の分析は、いくつかの有効性が指摘されてきた。例えば日記資料は、聞き取りが不可能な過去の民俗文化を再現するための有効な素材である。とりわけ長期間にわたって記録された日記は、民俗事象の継起的な持続と変容を検証するうえでも、重要な資料とみなされる。さらに通常の聞き取りではなかなか明らかにし得ない定量的なデータ分析にも、日記資料は有用であると述べられている。

確かにこのような目論見のもとに多くの研究が行われ、一定の成果が見られたことは間違いない。ただし日記を含めた文字資料の利用は、民俗学に恩恵だけをもたらしてきたとは、一概にはいえない。文字資料への過度な依存は、民俗学が担ってきた口承の文化の探求とそこで紡がれる日常的実践への回路を閉ざしかねないだろう。

そこで本稿では、これまで民俗学が、日記資料とどのように向かい合ってきたのかを問い直すことにしたい。民俗学者が、日記資料からどのようなテーマを抽出してきたのか、また、それらはどうのような手順を踏むものだったのか、そこでの成果は、民俗学に対して、どのような展開をもたらし得るものであったのかを検証していく。

これらの検証を通して、本論では日記研究自体が内包していた可能性を拡張することで、民俗学の外延を再構成し、声の資料と文字資料との総合的な分析の可能性を指摘した。

【キーワード】 日記資料、近代、民俗文化、歴史民俗学、声の文化

はじめに

本稿は、民俗学における近・現代の日記資料による研究成果を概観し、その位置づけを再考することを目的としている。これらの日記資料の研究が、どのような射程を含みこむものなのか、また、研究分野に対してどのような可能性を提示し得るかを示したいと考える。

これまで民俗学による日記資料の分析は、いくつかの有効性が指摘されてきた。例えば日記資料は、聞き取りが不可能な過去の民俗文化を再現するための有効な素材である。とりわけ長期間にわたって記録された日記は、民俗事象の継起的な持続と変容を検証するうえでも、重要な資料とみなされる。さらに通常の聞き取りではなかなか明らかにし得ない定量的なデータ分析にも、日記資料は有用であると述べられている。

しかし、日記を含めた文字資料の利用は、果たして民俗学に恩恵だけをもたらしてきたのだろうか。文献資料を通じた他分野との協働が、学問のオリジナリティの確立よりも、その縮減を助長していた側面もありはしないだろうか。あるいは文字資料への過度な依存は、民俗学が担ってきた口承の文化の探求とそこで紡がれる日常の実践への回路を閉ざしかねないだろう。しかし、その潜在的な危機は見かけ上の論文や報告書、自治体史などの生産物によって等閑視されてきたようにみえる。

そこで本論では、これまで民俗学が、日記資料とどのように向かい合ってきたのかを問い直すことにしたい。民俗学者が、日記資料からどのようなテーマを抽出してきたのか、また、それらはどのような手順を踏むものだったのか、そこでの成果は、民俗学に対して、どのような展開をもたらし得るものであったのかを検証していく。

ただしあらかじめ確認しておきたいが、このような手続きは民俗学という制度的な布置を温存させることを目的としていない。他分野との微細な差異を強調して、そのオリジナリティを主張するつもりもない。ましてや高等教育機関での位置づけや学会の存続云々など、論外である。むしろ、その目指す場所は、全く逆のベクトルを指向している。民俗学という研究分野が他領域との狭間に融解していく現状で、その学問の一面で未発のままに留保されている可能性をもう一度、再考し、その方法論を鍛え直すことで領域横断的な問題の設定と方法論の指定を行いたいと考える。

①……………被支配者層の日記資料への関心と資料化

民俗学では、近世から近・現代にかけて記された日記資料が、様々な視点から利用されている。そもそも、歴史民俗学や地域民俗学は、民俗事象の起源や系譜関係を明らかにするために、近世文書や地誌類などを恒常的に参照している。週れば文献資料と聞き取り資料の併用は、民俗学の初発から行われていた。柳田國男や折口信夫のテキストには、古典を含めた文献資料が縦横無尽に用いられている。

もっとも、近世後期から近現代にかけて記された民間の日記から、民俗文化を捕捉する試みは、1980年代以後に本格化することになった。もともと貴族や士族などの支配者層以外による日記資料への関心は、民衆史や社会史、地方史研究の草の根的な広がりと呼応しており、同時に地方自治体

の市町村史の編纂事業とも密接に結びついていた。例えば、佐藤誠朗は幕末から維新にかけての変革期の民衆がどのように時代状況を理解し、受けとめていたのかを明らかにするために、各地の庶民の日記の分析を行った〔佐藤 1994〕。「農民日記」について精力的な解説を行なってきた高木俊輔も、幕末の「志士」が登場する社会的背景を探るなかで、庶民の日記資料に関心を示すことになった。高木は、やがて日記資料に描かれた人びとの暮らしや地域社会のコミュニティの解明に向かうことになる。彼は良質な資料としていくつかの条件を付したうえで、近世後期から近代以降も書き継がれた 40 以上の「農民日記」の概要を紹介している〔高木 2013〕。

それらのなかには、島崎藤村が『夜明け前』の執筆に利用した信濃国筑摩郡馬籠村の『大黒屋日記』や、同じく筑摩郡馬積町村の『葦沢家日記』も含まれている。このような研究の背景には、「普通の人びとの心性の解明には」、個々人の生活の実情をできるだけはっきりさせる必要があり、「研究対象から切り捨てられてきた」記録の中にも、「生活史的観点から生かせるものが少なくない」〔高木 2013:66〕という視点があった。

庶民日記には、政治的事件やお触れなど支配に関する記事が少なくないが、地震・彗星、火事・大水・水害といった自然関係、商売や商品、家の経営、職人・奉公人のこと、村内の日常生活に密着した年中行事・興行・祭事、講事・角力・御日待・参詣のこと、喧嘩・口論、不義・密通、一揆・騒動・出入、賊、盗難、等々村の出来事、農作業や冠婚葬祭や病氣・医者のことなど多様な事柄が記されている〔高木 2013:8〕。

ここに列挙されている項目は、日記を資料として用いる諸研究のテーマの多くが網羅されている。時代が下る資料になると軍隊の話題、学校を中心とした教育の話題なども日記に記されることになる。近代医療やマスメディアの存在も記述の端々に織り込まれていくはずである。これらの多様な項目を掲げつつ、人びとの生活の諸相を捉えることが目指されているわけである。

このような関心を共有する研究者が特定の地域に集うことで、限定的な空間の中での悉皆調査や持続的な研究体制が可能になる場合がある。そのような試みは、地方の博物館や資料館による地域内の史資料の収集と保存に関わって実施された。また、都道府県史や市町村史の編纂という公的な性格を有する事業にも、多くの研究者が投入された。こうした地方自治体の歴史文化編纂作業は、時には文化財の保護政策とも関連づけられ、組織的な調査が可能になることもあった。それらの調査は長期にわたって記された日記が翻刻されて資料化される契機ともなり、多分野の研究成果へと結実していった。

例えば、東京都立川市の『公私日記』は、幕末の農村の実情を知る資料として、市の有形文化財に指定されている。1837(天保8)年から1858(安政5)年にかけて、旧柴崎村の名主、鈴木平九郎が著した日記である。この資料は1973(昭和48)年から毎年、翻刻が続けられ、全20巻の資料集がまとめられている。

立川市に隣接する武蔵村山市にも、市の文化財に指定された日記資料として、『指田日記』がある。⁽¹⁾『指田日記』は、武蔵国多摩郡中藤村(現武蔵村山市)の神職、指田撰津正藤詮によって記された日記である。藤詮は地元の原山神明宮の神職であるとともに陰陽師の資格と知識とをもち、占いや祈祷にも従事していた。日記は1834(天保5)年から1870(明治3)年までの37年間にわたって書き綴られている。そこには陰陽師や神職としての活動内容の他に、安政の大地震や慶応の打ちこわしの

ような村内外で起きた出来事や事件、年中行事、冠婚葬祭について記されている。

また、東京の八王子市では、『石川日記（諸色覚日記）』の翻刻と解題が続けられてきた。この日記は、武田家旧家臣の伝承をもつ東浅川町の石川家の当主たちによって1720（享保5）年から現在に至るまで書き継がれてきた日記である。半士半農身分の石川家の日記には天候や生業、諸行事に関わる様々な記事が記されている。このうち1912（明治45）年までの日記が、八王子市教育委員会によって翻刻されている〔八王子市郷土資料館1979-1993〕。

また、神奈川県横浜市の関口家に残されていた『関口日記』も1787（天明7）年から1901（明治34）年にわたる長期の日記資料である。1970年代から15年かけて1-21巻、別巻3巻の全24巻の翻刻が行われた。村の名主を務めたこの家や村の行事や慣行、事件や経済に関する覚書が記されており、ここでも多様な研究者による分析が行われている。地方史編纂にもなって見出され、翻刻されてきた日記資料は、地域ごとの偏差はあるものの、膨大な質量を備えるに至ったと言える。

他方で社会学者の古川彰らは、滋賀県マキノ町知内地区（旧知内村）で1745（延享2）年から書き継がれてきた『記録』の翻刻作業に携わっている。『記録』は、各々の時代の地域の長が記していたと考えられ、現在は区長が記録している。古川たちは、この『記録』を200年以上にわたる「村の日記」と位置づけ、そこに記された共同体の歴史を明らかにしてきた。彼らは、この「日記」以外にも多くの資料を翻刻したり、データベース化したりするとともに、現地におけるフィールドワークを通じて、総合的な調査研究を進めている〔古川2005〕。

さらに新しい時代の日記としては新潟県西蒲原郡坂井輪村の小作農、西山光一が、1925年から書き続けてきた『西山光一日記』〔西田・久保編1991,1998〕も、戦前と戦後に分冊されて翻刻されている。地元の大字小新で農業を営んでいた西山は、時代に翻弄される小作農の生活と地域の推移を記録しており、在地の農業経営・技術の改良の変遷過程を捉える貴重な資料とされている。

②……………日記資料の民俗学的な利用

前章でみた地方史や自治体史の編纂事業に招集されるのは、各時代を専門とする歴史学の研究者に限らなかった。事業の規模や編集方針による異同はあるが、先史時代を扱う考古学はもちろん、民俗学や人類学、宗教学や社会学の専門家が編纂にもなう現地調査に参加するケースも徐々に増えていった。多様な領域の研究者が参加するなかで、近代以後の日記資料にも民俗学的な関心が寄せられていった。もちろん、これらの資料への関心と問題設定には、研究を牽引してきた歴史学の方法論的な影響が大きいことはすでに見たとおりである。日記を含めた文字資料を扱うに当たって民俗学は、歴史学による史資料の整理と解釈のフォーマットに範を求めることが多かった⁽²⁾。

それでも民俗学者は、文字に記された過去の資料から「民俗」を抽出することで、自らの学問的特質を主張しようとしてきた。さらに自治体史に「民俗編」が組み込まれるようになると、学問的な実体は保証されたかにみえた。彼らが扱うテーマは、政治史や経済史といった歴史学の中心的なテーマからは周縁部に位置している。他方で社会史や文化史と総称される広範にしてやや曖昧な領域には、民俗学者が参入する余地が残されていた。それらの分野の研究者の中には、民俗学に関心を示す者もあり、同一の資料を用いた共同作業も可能であった。加えて現地への参入や地域社会に

についての民俗誌的な知見を背景に、民俗学者には一定のポジションが認められるようになった。その意味で日記研究は、現場や資料を介して民俗学が歴史学を始めとする多分野と実践的な繋がりを構築し得た「現場」として評価されるべきである⁽³⁾。

それでは民俗学における日記研究は、どのような意義があったのだろうか。それらは果たして、どの程度、学問のオリジナリティを保証するものなのだろうか。以下では、民俗学が日記資料から抽出したテーマごとに先行研究の概略を検討することにした。

比較的早い時期の研究として和田正洲は、近世に記された「作揚覚帳」を用いて、中山間の畑作の輪作の実態を明らかにしている [和田 1984]。彼の取りあげた資料は「日記」と位置付けられてはいない⁽⁴⁾。内容的にも年ごとの畑作物の種類と各々の作付量が記録されているのみである。むしろ、ここで注目したいのは、和田が文献資料から読み取った内容が、この後の安室や永島による日記を用いた生業研究とほぼ同じ視点に立っていた点である。

安室知は、昭和期に記された農家日誌を手掛かりとして、特定の農家で栽培された作物の特質とその時系列的な推移を明らかにした [安室 2012]。また、永島政彦は、群馬県山田郡大間々町の畑作農家の事例を分析する。1950年代の日記資料をもとに、水田のほとんどなかった農業経営の中で換金作物の種類や労働時間の推移を検証している [永島 1996]。永島は、各々の資料を詳細な図表に整理しつつ、「農家の生業構造は、単一の条件によって決定されるものではなく、いくつかの条件が骨組みとなって形成され」 [永島 1996:60] る様相を明らかにしている。湯川洋司は、『山の民俗誌』の中で、熊本県の五木村で、焼畑農耕が最終的な局面を迎えつつあった昭和 20 年代半ばに記された農業日記を紹介している [湯川 1997]。湯川は、この地域で山林を所有するダンナ層の生活変化について、日記の検証を通して明らかにしようとしていた。

日記研究は農業や林業だけには止まらない。漁業についても安室は、主に農耕と並行して行われる淡水漁業の形態について、日記資料から明らかにしてきた [安室 1992,1995]。さらに彼の低湿地帯論や複合生業論などの問題関心を引き継ぎつつ、日記資料の解説を行なったのは、秋山笑子である。秋山は、千葉県我孫子市の農民が記した「増田実日記」から淡水魚業を含めた複合的な生業のあり方を明らかにしている [秋山 2011,2014]⁽⁵⁾。また、漁業民俗に造詣の深い川島秀一は、カツオの一本釣り船の船主の「日記」の解説を通して、近年のカツオ漁の変容過程を明らかにしている [川島 2015]。川島は、日記の記述を話者にフィードバックしつつ、書かれた日記の意味を補っている。その試みは定量的なデータを交えながら、「船主側の経営の状況、そして信仰についても」 [川島 2015:112] 見通そうとしている点で評価されるべきである⁽⁶⁾。

農業と商業が重なり合う場所についての研究も、日記が素材として用いられている。山本志乃は、定期市で商いを行っていた農家の記録をもとに、取引される商品の特質と商業の内実を明らかにしている [山本 2010a,2010b]。このような研究は数少ないが、商家の「経営日記」の検証を行ってきた経済史などの成果ともリンクしうる興味深い試みである。

さて、生業とともに民俗学が取り上げたのは、衣食住や年中行事、通過儀礼についての検証である。対象となる時代が遡るが、都丸十九一は、餅なし正月の議論を援用しながら、雑煮の慣習の歴史的推移を中世の日記資料を用いて検証し直している [都丸 1988]。ここで都丸が主に用いた資料は、群馬県に残る『長楽寺永禄日記』であった。生業分析でも紹介した安室は、戦後農家の日記から生

活道具の変化についても整理しており、山村で利用されるようになる魚肉類の内実とその広がりについて検証している〔安室2012〕。

年中行事や通過儀礼については、複数の民俗学者が関心を示している。次節で示すことになる小川直之も日記の中から年中行事や通過儀礼に関する記述をピックアップしている。

時代はやや遡るが萩原ちとせは、近世資料に記された年中行事を中心に整理を行なっている。彼女は、神奈川県三浦半島に残っていた近世の日記資料から、当該地域の年中行事や生業暦についての記事をピックアップしている〔萩原1989〕。また、多仁照廣は、福井県美浜町の事例から、大正期の日記資料と聞き取り資料を併用しつつ、旧暦から新暦に移行しつつある当該地域の年中行事の概要をまとめている〔多仁2013〕。あるいは山田雄二は、『星野日記』に記された通過儀礼についての記事から、葬儀や法事といった不祝儀に関する世間つき合いの具体的な関係性や経済的なやりとりについて報告している〔山田1996〕。

小川と同じく次節で紹介する福田アジオは、近世の日記資料から当時の村落共同体における民俗信仰、とりわけ村の支配層が関与する雨乞いの儀礼や虫送りの祈願などの実態を報告している。彼は、現在の聞き取りでは呪いや言い伝えに過ぎない「牛の首を龍爪山に捨てる」〔福田2016:188〕という行為が、雨乞いの行事として実際に行われていたことを日記の中から見出している。今日では、意味が不明瞭な民俗文化の具体的なあり様が、近世の文字記録によって証明される事例と捉えられている。

このような村や個人のケガレに属する事例は、流行病などの疾病とそれに呼応する医療や民間信仰を、日記から読み解く研究にも接続しうる。梅野光興は、高知県「真覚寺日記」にみる疫病と呪術で、病氣と民俗信仰に関わる項目を抽出して議論を行なっている〔梅野2012〕。あるいは、菅根幸裕と島立理子は、千葉県君津市一宿の近世の名主によって記された「星野家日記」の解説で、「年中行事」や「信仰の諸様相」、「瘡瘡神と祈祷」などととも村医者による医療行為の記述をトピックとして紹介している〔千葉県立中央博物館編2016〕。実際、日常生活からの逸脱であり脅威でもある、病氣や災害についての事例は、公的な性格の強い日記から個人の日記まで、数多くの資料に記されている。

人々の日常生活や村落内の生活とは異なる位相についても、日記研究は明らかにしようとしている。その一つは、旅の経験を析出するための素材としての道中日記の研究である。西海賢二は道中日記を手がかりとして、旅の経験やそこで遂行される通過儀礼についても検討している〔西海2014〕。また、行商人の日記分析を行っていた山本志乃は、道中日記の分析も手がけている〔山本2010〕。

以上のように民俗学では日記資料を用いて、主に生業研究について大きな成果を上げてきた。また、民俗学的な視座から、日常的な食事、年中行事や民俗信仰のデータにも目配りしてきたことがわかる。民俗信仰との関連性の中で、病とそれらへの対処法について分析も行なっていた。さらには、道中日記を用いた旅や移動の実相に迫る研究や、商人日記から導かれた商業の研究も残されている。このように見ると民俗学における日記研究は生業研究に軸足をおきながらも、バラエティに富んだ成果を上げてきたようにみえる。

③……………他の研究分野における日記研究の広がり

前章では、主に民俗学における日記研究を概観してきた。それらの広がりを見るとき、日記資料に基づく研究が、民俗学の研究環境に一定の恩恵をもたらしたことは間違い⁽⁷⁾ない。前近代と近代との橋渡しとしての民俗学者像を補強し、研究分野のアイデンティティを強化する役割も果たしたかもしれない。日記を始めとする文字資料と聞き取り調査との関連づけも、民俗学がその学問的な特質を主張できる場であると捉えられるようになったわけである。ただし、日記を含めた文字資料への依存は、民俗学に恩恵とともに重大な課題を突きつけてきたことも確認しておかねばならない。この問題について論じる前提として、以下では、民俗学以外の日記研究の営みについてみていきたい。

すでに何度か言及したようにそもそも民俗学の日記研究は、先行する歴史学に学ぶところが多かった。近世の士族や庄屋層の日記などを中心とした研究蓄積のうえに、民俗学の研究が進んでいったのである。日記資料を用いた近代以後の農村社会へのアプローチも、少なくとも1960年代の後半には着手されており、1970年代の後半には大きく展開していったことは、すでに見たとおりである。

注意すべきは、研究分野の先験性や対象とする時代の近・現代へのシフトにとどまらない。民俗学が中心を占めているかにみえる生業研究についても、地方史研究の立場からいくつもの議論が行われていた。これまでに紹介した前近代の日記資料はもちろん、近代以後の日記資料を用いながら、目まぐるしく移り変わる農村の姿が示されている。例えば、小松芳郎は、長野県内の8地区に残されていた農業日記を対象として、地域と時代に応じた様々な農家の生活史の諸相を明らかにしている〔小松1994〕。稲作や畑作以外にも養蚕や焼畑などの様々な農業形態、地主小作関係といった社会構造の変遷にも関心が示されている。これらの記録は、日記資料のみならず、聞き取りから得たデータも併用することで資料の通時性と共時性を担保している。

同じ長野県についてジャーナリストの中村靖彦は、1915年から約80年にわたって書き継がれた篤農家の日誌をもとに、日本の農村の近代化についての詳細な報告を行なっている。彼が対象とした長野県の中郡、東筑摩郡山形村での農業経営は、大正から昭和、平成に至るまで幾多の変遷を遂げてきた。養蚕から乳牛、さらには高冷地野菜の栽培と、小規模経営の農業者が臨機応変に生産物を転換してきたことが、日記と聞き取り調査によって明らかにされている〔中村1996〕。

中村は、マスメディアに籍を置き、農業基本法を始めとする国家による農業への施策の中で日本の農業が変容し続ける様をマクロな視点から眺めてきた。彼の記述には、マクロな政策や経済動向とは異質な個々の農民の主体的な営みを明らかにしようとする視点が明示化されている。時としてその記述は、著者の視点に寄りかかり、資料の具体的な全体像が見えにくいという難点もある。それでも、日記の著者やその妻へのインタビュー、あるいは地域社会についての描写は、民俗学の紋切り型のフィールドワークとは異なる可能性を示していると言えるだろう。

次に衣食住についての研究は、主に家政学などの分野で積極的に行われていた。例えば、櫻井美代子は、前近代から明治・大正期にかけての主婦の日記から、当時の食文化の実態を明らかにしている〔櫻井2004, 2007〕。また、島崎とみ子は、幕末期の京都の呉服商が記した日記から、当時の食

文化の特徴を抽出している。彼女の研究では、特に人生儀礼での食〔島崎 2007〕や、年中行事における食〔島崎 2009〕についても、詳細な報告を行なっていて興味深い⁽⁸⁾。

ちなみに建築史を含む建築学分野からは、民俗学ではほとんど見られない日記資料を用いた住環境についての検証も行われている〔大場・神尾 2009, 小沢・長田 2011, 2013, 谷本 2014〕。

通過儀礼については、「関口日記」を用いて、当時の女子の通過儀礼を再現している議論も見られる〔久木・三田 1981〕。この論考では、女子の誕生後の3歳賀、7歳賀といった儀礼の内容や頻度、それらが行われた時代状況が詳細に分析される。一地域の個別の事例分析は、先行する民俗学研究の安易な一般化に対して批判的な視点を備えている。すなわち、前近代の一般の子女は「誕生日を祝うのは『初誕生』の時だけ」〔石川・直江編 1977, 159〕とされるのに対して、日記の事例では初誕生についての記載は一切なく、逆に3歳の髪置き、7歳の帯解きといった儀礼が、頻繁に登場していたのである。幕末期の個別の事例とはいえ、このような検証は民俗学の「伝承」研究が、過度な一般化には耐えられない側面を垣間見せている。

しかもこの論考が主眼とする当時の教育の内実について、民俗学での積極的な貢献はあまり見当たらない。それに対して、教育史を中心とした他の研究分野では、多くの試みがすでになされてきた〔松川 1976, 小嶋 1986, 1987〕。他にも高田知和は、昭和期の農村青年による日記から、自己啓発的な側面を捉え直そうとしている〔高田 1998〕。

さて、疾病とそれに対処する医療、あるいは民俗信仰についても、民俗学以外に多くの蓄積がみられる。宗教史の立場から林淳は『指田日記』を対象として、近世の陰陽道の職能の実態を明らかにしている〔林 1996, 2004〕。山本光正は、上総国望陀郡大谷村（現千葉県君津市）の朝生家に残る近世の日記資料をもとに雨乞や病気に関する加持祈祷の変遷を検証している〔山本 1997〕。さらに近世から近代初期にかけての医療行為の実態については、豊富な研究蓄積が得られている。増田淑美は鈴木平九郎による『公私日記』を素材として、子供の病気の症例を検証している〔増田 1994〕。長田直子も、患者の立場から医者への選択が行われていた状況を、『公私日記』の記録から明らかにしている。その結果として近世後期の都市近郊部の農村上層部では、すでに病気に合わせて医師を選別する知識とネットワークが整っていたことが解明された〔長田 2004〕。あるいは、川口洋は、『指田日記』や『公私日記』などの複数の日記資料を用いて、近世後期の天然痘（疱瘡）の流行の程度や、種痘の導入などについて整理している〔川口 2010〕。

近年、注目されつつあるのは、災害の記録を読み解く試みである〔北原 2002, 2007 小林 2013〕。現状の分析で用いられる日記は前近代の公的な性格の強いものが多いが、今後、近代以後の幅広い事例からも、災害の記憶が読み取られる必要がある。例えば古川彰は『村の日記』から当該地区を繰り返し襲った水害の記録について詳細な報告を行なっている〔古川 2005〕。このような試みは、被災地域での記憶の継承とも重ねつつ、今後、多面的な検証が行われるべきである。

日記研究は以上の領域に止まらない。ここでは深く立ち入れないが、道中日記については、経済史や交通史、歴史地理学といった分野において、膨大な研究蓄積がある。あるいは商家など都市部の人々が残した日記資料についての研究も、近代以後に的を絞ってさえ多くの蓄積がある。さらに戦時下での軍人達が残した日記は、当時の統制的な環境を照射する資料として、多くの議論がなされている。

以上、幕末から近・現代につながる日記資料を用いた研究のテーマ的な広がりを見てきた。その多くは、民俗学の研究に先んじたものであった。同時に民俗学が研究の俎上に載せていない多くの範疇についての論考があることも明らかになったわけである。

④……………民俗学における日記研究の可能性

前章では日記研究の広がり、民俗学の射程を時期的にも分野的にも、はるかにしのぐものであることが示された。もっとも限定的な範疇を取り扱うことが一概に狭量であるとは言えない。ここで問われるべきは限定的なテーマを対象とするなかで民俗学は、独自の理論的な視座を獲得しえたのかという点である。そこでこの節では、民俗学的な日記研究の展望について論じた3人の研究者の主張を検証することにした。最初に検証するのは、日記資料を用いて生業研究についての幾つもの論考をまとめてきた安室知である。すでにみたように彼は、自らの複合生業論を展開するうえで、積極的に近代以後の日記資料を用いてきた。

これまで民俗学は聞き書きの及ぶ時代に書かれた農家日誌にはあまり注目してこなかった。それを利用するメリットは民俗学の場合とくに大きいにもかかわらずである。民俗データの欠点として定量化が弱い点が挙げられるが伝承に頼りつつ聞き取りで遡ることが可能な時代の文献史料を利用することによって今まで不得意だった定量的な部分を補完することができる。

そのことはまた反対に、民俗学は文献史学以上に有効にそうした時代の文献資料を使うことが可能であることを示している。近代史や経済史学でも農家日誌をよく利用してはいるが、聞き書きによる民俗誌をベースとした農家日誌の解説はそうした文献研究の成果を乗り越える可能性を秘めているといえよう [安室 2012:51-52]。

彼は日記の記述を定量化することで、民俗学における定性的な資料を補完しようと捉える。彼がここで定量的と位置づけるのは、実際に収穫された作物の種類や数量、労働に投下された人数や作業の日数、時間数などである。これらの具体的な数量や時間は聞き取り調査から析出することは難しく、文字資料の分析によって明らかにし得ると安室は論じている。⁽¹⁰⁾

この問題と関連するのが定量的なデータにとどまらない記述への言及である。

彼は自らが日記資料の解説のなかで看過していた事項に気づいたという。そこで彼が注目したのは「まごつき仕事」という言葉であった。彼が分析対象とした長野県長野市若穂綿内菱田の農家の日記の中には、この言葉が頻繁に現れていたにもかかわらず、定量化を優先した分析では、それらの用語に目を向けることができなかった。しかし、改めてこの言葉に注目すると、それらは主要な田畑での作業に対して、一連の作業の準備や用具の掃除、片付けと言った周辺的な作業を指す言葉であることがわかってきた。「まごつき」のような、言ってみれば周縁的な作業があって初めてメインとなる仕事が成り立つ [安室他 2012:3] という視点が浮上する。ちなみに、この「まごつき」に再注目したきっかけは、現地調査でのやり取りがあったからだという。「聞き書きによる民俗誌をベースとした農家日誌の解説」の一つの成果と捉えることもできるだろう。

ここで彼の議論を敷衍するならば、一つのテーマを定量化して日記から読み取るだけでは十分ではない、ということである。生業に限定してさえ、メインとなる生業とそれに関わるマイナーで周縁的な作業が記載されており、両者を合わせてはじめて人々の営みが見えてくる。日記の性格にもよるだろうが、このような視点を広げていけば、生業と親族、近隣との関係、あるいは行事や儀礼とのつながりといった生活の諸相を日記から見出す視座が必要とされるだろう。それは日記というテキスト自体を捉え直し、その位置付けを問い直す視座へと向かうことになる。

また安室は、彼の著書である『日本民俗生業論』の中で、中山間地農村で記された日誌を対象として、生業以外の生活の変化にまで検証分析を進めた議論を行なっている。安室がそこで取りあげたのは、山口県の阿武郡川上村の農家の日誌である。彼はこの日誌から昭和20年代後半から50年代半ばまでの約30年間の生業の変化とともに、衣食住の変化についてもまとめている〔安室2012〕。

戦後における生業、とりわけ農業では、一連の水田耕作に用いる機械が導入され、化学肥料や農薬が盛んに利用されるようになる。他方で二毛作やアゼ豆といったかつて行われていた農業形態は消えていった。また、特定時期の特徴的な農業の形態として、ウシの飼養や水田養魚といった形態が試みられることもあった。他方で生活の変化では、食事における肉食の一般化の過程や、家電製品としてテレビや電気洗濯機など「三種の神器」の購入時期などが特定されている。これらの記述によれば、伝統的な農法は姿を消し、食生活でも地域とはかけ離れた食材が流入してきたことわかる。ここでの変容はかつての民俗学の範疇から言えば衰退であり、消滅と位置づけざるを得ない。しかし、その過程を現地に住む人びとにとっての生きられた歴史であり、経験の一部であると捉えれば、既存の民俗学のカテゴリーを越える可能性も指摘できるだろう。

次に紹介するのは、前節で記した地方史編纂の日記研究とも密接に連携しながら、民俗学における日記研究について論じた小川直之である。小川の「日記と伝承」では、日記資料が民俗学でどのように利用できるかを論じている。その研究の方向性には、「記述内容を素材とした具体的な研究」と「日記というものの存在自体についての研究」〔小川1996a:47〕があるとされる。前者は、先行研究にみるような各論レベルでの日記の利用である。他方で後者の議論は日記についての「資料論」と位置付けられる。日記には、「御用留などの公的な性格」と日々の生活や生業に関する私的な記述に分化している。このような経緯の歴史的な把握と「その背景にある記録者の心意、社会状況の推移」を知ることが目的とされる。

このうえで小川は、日記という形式で生業や生活が記録された歴史的な背景を明らかにしようとする。彼は近世の神奈川県域の日記資料を概観し、農業日記、道中日記、経営日記などの各種の日記が出現した時期を整理していく。各々の日記が現れる時期や、それら増加する時期から小川は、「十七世紀後半から十八世紀前半にかけて生活の枠組みが変化し、大きなうねりのように伝承の持つ意味が変質していったと推測できるのではなかろうか」〔小川1996a:52〕と捉えている。この事例分析は、先行するマクロな研究史とも合致するものであり、日記の背景に社会変動を見据える視座は確認されたかに見える。

しかし、この時期の伝承的世界の変質には、「比較的均質な情報や知識が文字記録によってあまねく浸透し始める」と推測するだけでは、議論は不十分である。そもそも彼は日記という文字記録の出現時期を特定し、そこに「生活の枠組が変化」する徴候を捉えているわけである。ところが、

その原因が文字記録の浸透というのでは、原因と結果を取り違えているに等しいとも言える。農村部に文字が浸透し、リテラシー能力に長けた庄屋層が増大したことは間違いないだろう。しかし、彼らが文字を取得しようとしたのは、文字によって得られる様々な経済的な効果、政治的な背景があったと考えるべきである。

そのことは十分に斟酌したうえで、彼の議論には留保すべき問題をはらんでいる。それは、彼が「日記」の「存在自体についての研究」の目的を、「記録者の心意、社会状況の推移」へと直裁に結びつける点にある。この「日記自体の研究」という視点は、近代以後の資料を見直すときも、非常に重要な視座となりうる。それは前節で見た日記についての方法論的な視座への民俗学における数少ない目配りだからである。けれども、文字資料と口頭の「伝承」を比較したり、執筆者の「心意」に向かったりするためには、資料の質的な差異を考慮したいくつもの理論的な仕掛けが必要とされる。むしろ、日記というテキストをめぐる書記の地平での検証とそれらを取り巻く社会的、経済的、技術的な関係性の束の中で捉え直す必要があるはずである。⁽¹¹⁾

小川はまた、各論レベルでの日記資料の解説も行なっている。そこでは、神奈川県伊勢原市の「神崎守三郎日記」という昭和初期の日記資料が分析の対象となる。この「日記」は、1926(昭和2)年から1939(昭和16)年という、経済恐慌期から太平洋戦争へと突入していくまでの過酷な時代に記された。ここから彼は、①日次とその日の天候、②自分が行った農作業・家事などの活動、③家族員の農作業・家事などの活動、④自分の家族員の健康、⑤儀礼や行事、⑥地区社会での公務、⑦戦時体制化での活動を抽出している。

この各論のレベルで興味深い点は、民俗学では抽出しにくい戦時体制化の活動をカテゴライズしていることである。それらの記述は、昭和10年代以後にその頻度を増していく。1937(昭和12)年には、出征者の見送りや戦死者の出迎への記述とともに役場の区長会議で「国民精神総動員」や「南京陥落祝賀」[小川1996b:72]の協議が行われたとされる。その年以後、戦時関連の記述は数を増していき、地域社会が日本という国民国家の総力戦体制へと編入されていく過程が示されている。

ここでポイントとなるのは、このような流れが人々の日常生活や民俗文化をどのように変容させていったのかという点である。1939(昭和14)年の記事には、「消防団が、警防団となる」ことが協議されたり、「神社で武運健全の祈願」[小川1996b:73]が行われたりしている。日常的な社会関係の変容は、国家権力による上からの圧力とは言い切れない側面をそこに見て取ることもできるだろう。

また、⑥地区社会での公務についても、地元の「藤野消防に関すること、養蚕組合に関すること、藤野地区運営に関すること」[小川1996b:71]といった、近代以後に成立した組織に関する記述をピックアップしている。それらは、生業や行事と密接に関わりながらも、地域社会が新たに構築した社会関係に他ならない。小川は、各事項について具体的な記述を紹介したうえで、その社会的な背景や時代状況に照らし合わせて検証している。

ただし、最終的に彼が踏み込んだ議論を行うのは、日記の中の農作業のサイクルと栽培された作物の諸相に関してである。確かにこの分析では、当該地域で養蚕や煙草が現金収入として大きなウエイトを占める一方で、水田稲作が並行して行われていたことが実証された。また、大小の麦の他に芋類、陸稲なども栽培されており、農閑期の1月から4月にかけては、藁仕事や山仕事にも従事していた様子が整理されている。

しかし、ここでの議論の可能性は、狭義の民俗学的なカテゴリーの分析に禁欲することではないだろう。むしろ、そのような領域が、近代以後のシステムとどのように関連づけられていったのかを詳細に見ていくべきだったはずである。国家的なシステムの介入と地域社会の営みの共犯的な側面とそこで生じた微妙な齟齬について、日記から読み取れることは多いはずである。

最後に福田アジオの議論を参照したい。歴史民俗学の立場から福田は、民俗資料としての日記記述の可能性について論じている。彼は近世の多くの日記資料が研究の俎上に載せられ、「利用可能な形で翻刻されている」利点を指摘する。日記は「意図しないで民俗を豊富に記述して」おり、それらの活用を通して、「特定の時間と空間の中で展開した民俗を把握すべき」[福田2016:186]だと述べる。

福田は、日記資料を用いる有効性としていくつかの点を強調する。まず、過去の記録と現在の調査記録をつなぎ合わせることで、民俗の連続性や継続性が確認できるとする。しかもそれらの過去の記録からは、現在では「知ることができない民俗の実在」の姿が浮き彫りとなる。ちなみにこのような連続性は、個々の民俗だけではなく民俗の伝承母体とされるムラと近世の支配単位である村との連続性としても、遡及が可能であると捉えられている。

また過去の日記には、しばしば、「民俗をめぐる村落内対立・抗争という矛盾」[福田2016:202]についての記録が登場する。これらの事例を明らかにすることで、社会がなんの矛盾も葛藤もなく、民俗文化を伝えてきたというイメージを払拭することができる。さらに日記の記載には、いつ、どこで、何を、に加えて誰がについて明記している。これらの記録からは類型化され、抽象化された集団ではなく、当事者である個々の「具体的な人間の行為としての民俗」[福田2016:202]を知ることができるという。

日記を始めとする文字資料は、聞き取り調査が可能な時間軸を超えた民俗や伝承母体の理解につながるという福田の指摘は、後に改めて吟味することにした。彼は民俗の連続性だけでなく、その変容過程の究明にも文字資料の有用性を認めており、単に起源の古さを主張しているわけではないことは、ここで確認しておくべきである。

しかし、村の紛争や不和の問題と日記に書き残された個人の問題を、日記研究の意義と位置づけることは、どのように理解し、評価すべきだろうか。これらの特徴をわざわざ文献資料に見いだすことは、奇妙に転倒した視点にしかみえない。このことは、通常のフィールドワークの経験を思い起こせば十分だろう。何より私たちは、対面的な状況の中で聞き取り調査を行う。相対する話者は個別の人格を有し、個別の人生を歩んできた「個人」に他ならない。我々は個人ありきで調査を出発するのであり、そこで聞き取られたデータが村や地域社会に直結する訳では決してない。また、地域のなかで複数の聞き取りを行なっていけば、必ず人間関係の不和や葛藤に行き当たる。それらは家族や親族間での諍いのレベルから村を二分するような根深い事案まで様々である。間違いなく言えることは、今日の調査においてそのような葛藤のない地域社会など皆無に等しいということである。「個人」や「葛藤」を等閑視できる調査というのは、単に調査をしていないに等しい。

だから、過去の記録からのみ「個人」や「葛藤」を見出せるという主張は、ごく普通のフィールドワークの経験に照らし合わせても、容易に納得できるものではない。熟練の調査者である福田としてはあり得ない発言にも思われる。

しかし、このような個人の経験や情報や地域内、時には地域間での紛争や葛藤について、現在形での記述が極めて困難であることも事実である。まず、個人の歴史や経験についての記述を、書かれた当事者が拒む場合がある。当事者の親族が記載を拒むこともある。市町村史のような公的な発刊物の場合、教育委員会や地方自治体が難色を示すことも多い。葛藤についてはさらに多くの問題が生じる。そこに介在する人は複数人であり、それぞれの意向や立場性を十分に踏まえた記述を行うことは極めて難しい。当事者のうちの1人でも記載を拒むなら、事実上、文章にすることはほぼ不可能になる。

それに対して、近世の記録であれば個人名が登場しても、紛争の記録があっても、それを問題視する眼差しは、相対的に緩やかなものになる。福田は現在について語ることが困難な民俗の「本来の姿」を、記載可能な過去の時代に投影することで描き出そうとしているのだろうか。あるいは、歴史民俗学では可能な個人や葛藤についての叙述が、現在の民俗調査において忌避される現況を暗に批判していると捉えるべきだろうか。仮にそのいずれであろうとも、そこには民俗学者としてのアンビバレンツな意識が、垣間見えると言わざるを得ない。とりあえずここでは過去の資料のみが「個人」や「葛藤」を抽出し得るわけではない、という単純な事実を指摘しておくにとどめたい。

⑤……………日記研究の可能性と限界

前章では民俗学における日記への方法論的な視座を確認してきた。そこでの議論を整理すると日記研究の可能性は、大きく分けて3つに分類できる。

まず、資料の定量化の可能性が日記資料の優位さとして見出されていた。日記のように定期的に一定のフォーマットに従って記録されたデータは数量化しやすい。そこでピックアップした項目は、特定の分類基準に沿って差異化し、序列化し、然るべきグリッドにおとしこむことが可能とされた。こうして年単位で行われる農業や漁業の生業暦が、そこに投入される労働時間や労働人数の一覧表として構成されることになる。

次に日記資料のアドバンテージとして、聞き取りでは不可能な過去の民俗事象を把握し、時系列的な分析が可能になるとされた。確かに時代が進めば進むほど、聞き取りが可能な時代の深度は浅くなる。現代（2018年時点）では、戦前の経験を聞き取ることもほぼ不可能になっている。10年後には高度経済成長期についての聞き取りも困難になるだろう。そのような状況下で過去の民俗を知るために日記資料（を含む文献資料）は、ますます重要なリソースになると考えられる。

史資料の利用は、現行の民俗調査では不可能な過去の事例を確認できるだけではない。より重要な点は、民俗の連続性はもちろん、それらの盛衰を視野に入れた動態過程を描くことも不可能ではないと考えられる。この点は、次の民俗調査との相乗的な資料解釈によって、より十全に行われるだろう。過去の民俗の復元とその変遷過程の検証という目的において、このような資料の利用目的は、とりわけ歴史民俗学においては一貫性を持った主張である。

第3に民俗学者は、これらの文献資料と現地の民俗誌的な知見の両面に精通することで、相乗的な検証が可能になるという。この特質は安室をはじめとして複数の研究者が指摘してきた。聞き取りで得られるデータの比較は、小川直之が関わった『昼間日記』の資料集の構成によっても示され

ていた。福田アジオが示す歴史の動態を明らかにする構想の過程にも、現在の聞き取り調査が念頭に入っているだろう。3節で紹介した多仁照廣も、記載内容が「確定されている日記に比べ」、聞き取りでは質問を通じて「内容を膨らませることが可能であり、豊富な内容を伝えることができる」[多仁 2013:31] と聞き取りの重要性を指摘していた。

民俗学的な日記研究を、以上の方向で進めていくなら、次のような図式化が可能になるだろう。すなわち民俗学は、日記資料を始めとする文献資料に頼りつつ、主に近世以後の民俗の変遷過程を再構成することを目指すことになる。そこで対象とされるのは、生業を中心に年中行事や通過儀礼、民俗信仰など民俗学が研究対象として囲い込んできた領域を踏襲する。同時にそれらの詳細な内容については、現在の聞き取り調査で得られた資料を補足し、それらの情報を、適宜、歴史に還元することによって変遷過程を重厚なものにしていくことになる。

ここで予め断っておくと、以上の3点をして民俗学のオリジナリティと捉えることはかなり難しいことを指摘しておかねばならない。

まず、定量化をめぐる議論は、すでに述べたように資料から数量化可能なデータを抽出し、統計的なデータの蓄積をもとに議論を行うというスタイルである。しかし、このような作法は、経済史を始めとする実証史学や地理学などでは、ごくありふれた手法である。安室知は民俗学の基盤となる聞き取り調査から得られる資料を定性的ものと位置づけ、それへの異議申し立てとしての定量的な資料の必要性を唱えた。しかし、それを横断的な学問領域の中で考えるならば、逆に民俗学自体のオリジナリティは縮減してしまいかねない。⁽¹²⁾

同じことが、歴史民俗学についても言える。そもそも日記資料の解析は、文献史学が中心となって探求してきた分野である。どれほど民俗学が生業を中心とした領域での優位性を主張したところで、文字資料の検証と分析において歴史学者を超えることは難しい。少なくとも文字に依存する民俗学が学問的なオリジナリティを主張するには限界があると言わねばならない。

そのような限界を民俗学者たちも自覚していたのだろう。そこで彼らが主張したのが、フィールドワークとのセットによる研究スタイルで自らの優位性というわけである。しかし、聞き取りという作業もまた、民俗学に限定されるものではない。すでに見てきたように民俗学者以外の研究者も、文献資料と聞き取りを併用して多くの研究を行ってきた。近現代史を中心とした歴史家たちも、聞き取りやオーラルヒストリーに注目するようになっていく。中村靖彦のようなジャーナリストも、日記を起点としながらインタビューを行うことで、民俗学とは異なる視点からの成果を生み出している [中村 1996]。

このような成果に対して、民俗学が優位性を主張するためには、相応の精緻な理論や、対象を分析するための方法論が提示されなければならない。しかし、これまで見てきた日記研究には、体系だった聞き取り調査についての説明を見出すことはできなかった。少なくとも社会学や文化人類学では、聞き取りによって得られる口承や声について多くの理論的な進捗をみることができている。もちろん、民俗学周辺でも、口承と書承、声と文字の質的な差異を考慮しつつ、両者を分析の俎上にのせようとする試みがなかったわけではない。⁽¹³⁾しかし、それらの方法論的な営みに対して、日記研究が提唱する聞き取りと文字資料との統合的な検証は、あまりにナイーブである。以上の点を踏まえると、民俗学における日記研究の展開は、研究蓄積の割には限定的であると言わざるを得ない。そ

ここからは、聞き取り調査が頭打ちとなった今日のフィールドワークへの、窮余の対症療法的側面が垣間見える。

しかしながら、4節で紹介した論考には、既存の視点から漏れ出る視線や、新たな方法論を予感させる指摘がなかったわけではない。例えば、安室や小川が実際の事例分析で記したような日記のカテゴリーの問題である。小川の議論では、民俗学の外延として馴染み深い生業、年中行事、通過儀礼、信仰など以外に、近代的な社会組織や、戦時下での社会変容、軍隊の問題が記されていた。安室の事例でも生業暦から出発しながら、戦後の農業の機械化や食の変容と言った現代的なカテゴリーが詳らかにされていた。

仮にこれらのカテゴリーを民俗学的なカテゴリーと重ね合わせつつ議論を深めていけば、閉塞的な研究領域を切り開く突破口となっていたかもしれない。このような作業は決して孤立した作業でも、他の研究分野への侵犯でもない⁽¹⁴⁾。実際、近代以後のナショナリズムと民俗、あるいは技術革新と生業といった問題は、すでに個別の研究者によって進められてきたことを想起すべきである⁽¹⁵⁾。

それらをより組織的に行うためには、日記資料とそこに書かれた内容から、民俗学の既存のカテゴリーを見直す作業が必要となるだろう。日記資料には、民俗学の既存の範疇を凌駕する記述がいくらかでも見出せる。問題は民俗学者が、それらを十全に対象化できていないだけなのである。ここで求められることは、日記資料の全体性を余すところなく対象化し、検証する研究者の視座の拡張を促すことにある。資料全体を可視化する作業は、必然的に日記のデータベース化、アーカイブ化を意味する。定量化という言葉も、このような全体性が付与されて初めて、説得力を持つようになると考えられる。言い換えれば日記資料の定量化は、それらのアーカイブ化の一部として再組織化されるべきである。

第2に福田が指摘していた「個人」の問題と、小川が指摘していた日記という形式の伝承や経験の記録化という問題がある。福田の指摘が文献資料に限らないことはすでに指摘しておいた。実際、そこで語られているのは、民俗の担い手や実践の主体が固有名で表されているという指摘であった。しかし、担い手や主体については、民俗学においてこれまでも話題になっている。例えば、高桑守史は、漁村の民俗の事例分析において、個別の担い手の存在について「伝承主体」という述語を提案していた [高桑 1994]。あるいは中野紀和は、都市祭礼研究の詳細なモノグラフを作成するなかで個別の主体やそのライフヒストリーに注目している [中野 2007]。

ただしここで問い直すべきは、そもそも、資料となる日記を書いた主体であり個人とは、どのような存在であるのかという問題である。ここに小川が語る「日記執筆というきわめて自己を意識させる行為」の意味が改めて問い直されることになる。彼の指摘する伝承の変質は、時代が下りリテラシーが浸透することで、一般の農民から女性、青年期以前の子供にまで展開していくことになる。ある意味で、近世後期に起きた社会的な変容は、近代以後も他の社会的経済的環境と相まって、増大し続けていった。その只中で輪郭づけられていったのは、文字を通して地域を超えた国家規模の情報を取得しつつ、文字によって自らの経験や考えや価値観について記録し、反芻する個別の存在であった。それを近代的な個人と呼ぶことにそれほどの矛盾はない。

上記に記したように散発的に「個人」が問われることはあっても、民俗学において個人や主体がテーマ化されることはあまりなかった。それどころかこの学問では、主体や個人といった領域を、

ムラや伝承母体に還元し、無化することに執心してきたとも言える。

しかし、近代的な個人は、ムラや伝承母体といった閉鎖的な領域を内側から壊し、融通無碍に外部と接続していく。彼らは公的な教育制度のもとに獲得した読み書き能力を通して、国民、あるいは臣民としての主体を獲得していく存在でもある。日記をめぐる対談でも井上攻は、日記の幅広い展開が、国民国家の成立と不可分であることを指摘していた〔井上ほか2013〕。そのより具体的な位置付けは、「日記を国民教育装置」と捉える西川祐子の議論にみることができる〔西川2009:13〕。

以上の問題に加えて、聞き取り資料と文字資料の質的な差異に関する議論の可能性についても再検索してみよう。その文脈で想起されるのが、安室が述べていた「まごつき仕事」についての議論である。彼が日記から抽出した詳細な農事暦と聞き取りとの往還によって見出された「まごつき」は、生業のあり方を多角的に捉えるための事例として出された。しかし、もっと重要な指摘が、同じく生業研究を行っていた永島によって指摘されている〔永島1996〕。彼によると農事暦についての聞き取りの中では「5月が一番忙しい」と述べられていた。しかし、日記に記された労働時間を積算していくと、別の時期の方が労働時間は多かった。労働時間の定量分析と現実の声ないしは記憶との間には、ズレが生じているのである。彼はこのような記憶のズレが生じた要因として、労働の質的な差異をあげている。5月にはいくつもの生業が重なり合っているのに対して、実際に労働量が多い9月などは、養蚕のような限られた仕事に労働力を投入していたという。

彼の仮説には一定の説得力を感じるが、ここで重要な点は、語られた記憶と記された記録、あるいは声と文字に潜むズレや切断面の存在である。おそらく主観的な忙しさが文字資料によって覆されたといった偏狭な視点に固執するべきではない。確かなことは、多様で異なった種類の累積的な労働の方が、単調な長時間労働よりも記憶されやすい点である。いみじくもここでの議論は、単に聞き取りを否定するのではなく、両者の特徴を浮かび上がらせているとも言えるだろう。

逆に書かれた記録と語られる声のより深い次元での相互補完性を辿りなおす可能性も示されている。それは川島秀一の報告するカツオの一本釣り漁師の記録である〔川島2015〕。彼がそこで紹介する日記は、大きく二つのタイプの日記に分けられる。一つは、実際にカツオ漁を行っていた際に記した船上での日誌、もう一つは、船を降りてから主に漁に用いる餌（カツオをとる際に用いるイワシ類）を調達する「餌買」に従事してからの日誌になる。

主に後者について整理を行った川島は、各地で仕入れた餌の数量や支払い金と、それらに対応する形で水揚高とその単価、水揚港などについての一覧表を作成している。さらに川島が目にしたのは、日記に記された「信仰」の事項である。日記には、本人が参詣した神社の他に留守家族が参詣した寺社も記されている。さらには日記の中で祈願している神仏もあり、それらの事項も一覧化されている。多い時には、天照や八幡、観音をはじめとした20近い神仏が、航海安全や大漁祈願といった、普遍的にして個別の切実な願いとともに列挙されている。

川島がここで示した方法は、生業に関わる事項をピックアップして定量的にまとめる方法と変わらない。加えて彼は実際の聞き取りによって漁師のライフヒストリーや漁に関わる細かな技術や経験を明らかにしている。その実証的な手続きの先に見出されるのは、ある意味で極めて非合理的な神仏への信仰の領域であった。もちろん、合理主義が進めば非合理的な信仰は後退するという図式が覆されて久しい。だから、ベテランの漁師の営みが、矛盾しているとか逆説的であるなどという必

要はない。

それでも彼の日記から立ち現れてくるのは、過酷な海での生活の中で個人が育んでいった民俗信仰の姿であることは疑いようがない。先に述べた定量化や聞き取りを経て川島は、日記に記されたある一文に目を向ける。それは「身も心もつかれました。頑張っています。ご利やくお授りください」という直截的な神仏への希求であった。彼はこの表現に感銘を受け、「これこそが漁師の根源的な信心であると確信される」[川島 2015:128]と記している。確かにここで示される「信心」は、日誌に記された文章の一部であり記録されたものである。しかし、同時にそれは漁師の心の底から絞り出された声を表出したものにみえる。丹念に一覧化された参拝の記録とは異質な響き、あるいはもっと根源的な部分で切り結ばれた生への切望が顕在化したとも言えるだろう。

おそらく、ここにはいくつもの断層や切断面を乗り越えて探求すべき課題が潜んでいる。声と文字、口承と書承を対立項として分節化するだけでなく、文字の行間に現れる声の響きに気づき、声の狭間に潜む文字の論理を辿りなおさねばならない。そのことは、「声の文化」と「文字の文化」を分節化し、両者のラディカルな切断面を描いてみせたオング自身が指摘していたことであった。すなわち、西洋における音声中心主義の基礎とも言えるプラトンの言説自体が、文字によって表現されているという事実から彼は、両者の相互補完的な側面を見抜いていたのである[W.J. オング(林ほか訳) 1991]。川島による日記資料の解釈は、実証的な視座を重ね合わせながら、逆説的に漏れ落ちる人びとの声の所在を暗示しているのではないだろうか。

おわりに

本稿では、民俗学における日記資料を用いた研究の諸相について見てきた。概略的ではあるが、民俗学的な研究の系譜とその課題について検証することができたと考えている。

前節で示したように、特定の範疇に絞り、聞き取りでは到達し得ない過去に遡って民俗の変遷過程を捉えるという歴史民俗学の手法は、一つの方向性としては肯定できる。ただしそれでは、民俗学が掲げていた人びとの声や身体から固有の文化や歴史を再構築していこうとする視座は、大きく後退してしまう。そこで本稿では、日記研究自体が内包していた可能性を拡張することで、民俗学の外延を再構成し、声の資料と文字資料との総合的な分析の可能性を指摘した。

ここで確認しておくべき重要な視座として、書かれたことも語られたことも、実際に起きた現実そのものではない、ということである。声や文字といった異なるメディアにおける質的な差異とともに、それらによって表出された経験や知識、価値観と現実そのもの間にも、深い亀裂や断層が広がっている。しかしながら、書くことも語ることも生きられた現実の延長であり、その一部であり、新たな展開でもある。その意味で文字も声も様々な濃淡を浮かばせ、それ自体に亀裂や断層を生み出しつつ、分かち難く積み重なり、折り重なり、褶曲した記憶と記録を堆積させてきたのである。

それらの諸断層を等閑視するのではなく、積層化された記憶と記録を注意深く腑分けし、分節化する一方で、乖離した各々の層を関連付け、統合し、全体を見渡す技法を身につける必要がある。このような作業は、確かに調査の現場で生きられた声に接し、人々との対話の中から歴史や文化を紡ぎ出していく立場にしか着手できない。それを民俗学と呼ぶかどうかはともかくとして、このよ

うな態度と方法論を鍛えていくことが、日記を含めた文献資料を読解するうえで、重要な視座となるはずである。

註

(1)——武蔵村山市の文化財指定を受けたのは、1976(昭和51)年である。

(2)——実際、本文で取り上げた小川や福田の議論でも、近世資料やそれらを基礎とした歴史研究の成果を指摘している。

(3)——もっとも西海賢二は、民俗学の現地調査が活かされた事例は、東京都西多摩郡檜原村の『牛五郎日記』が唯一であると記す。彼によれば「いまだに日本の文献史学は民俗学を評価するどころか利用するだけではないか」[西海1999:2]と述べ、近代に連なる日記資料に民俗学的な調査が十分に反映されていないことを嘆いている。ただしその後、民俗学者が日記資料を用いた研究は増加していくことになる。

(4)——何が「日記」と位置付けられるかを明確化することは難しい。ただ長期にわたって記された「日記」のなかには、非常に単純で定型的な記述から、地域の情勢や個人の心情といった多面的な記述が付加される過程が見られる。例えば、吉村利男・鈴木えりもが報告した「伊勢国一志郡堀之内村多賀家の日記」は、4代の当主が近世末から大正期にわたって書き続けた膨大な資料である。初期の記述は、天候と金銭の出入のみであったが、次代になるとそれらの記述に加えて日々の覚書が記されるようになる。さらに次の代では、金銭の出入と覚書が独立して記されるようになったと言う[吉村・鈴木2016]。

こうした点をふまえて本論では日記を、比較的長期にわたって持続的な意志のもとに書かれた文書記録とゆるやかにとらえて論を進めたい。

(5)——『増田実日記』については、すでに千葉徳爾が「人の生き方」という論文において引用している。彼は、この論文で日記資料に記されたライフコースと伝記資料とを並行して用いている。その議論は民俗学の日記研究としては、かなりユニークな着眼点を持っている[千葉1990]。本来は本文で扱うべきであったが、論文における日記の引用の仕方が限定的なため、ここでは割愛している。しかし、その方法論は同時代の民俗学はもちろん、その後の日記研究にも見られない独自の視点を持っている。稿を改めて紹介したい。

(6)——この他にも川島は、小型沿岸鯨漁に従事していた北海道の漁師が残した船上での「日記」をもとに、昭和

40年代の捕鯨の実態の再現を試みている[川島2014]。ちなみにカツオ漁については、林圭史が大正期に操業されていたカツオ漁の日記を用いて、詳細な分析を行っている[林2011]。

(7)——研究分野としての利点は、これまで見たような他分野との共同作業を可能にするアリーナであったという点である。そのような事業のなかに民俗学というディシプリンが組み込まれることで、少なくとも次の3つの点での変革が訪れた。まず、他分野から研究分野としての認証が得られたことを意味し、民俗学の外延が地域の歴史や文化の研究に組み込まれる契機となった。次に共同作業を通して、他分野の問題設定や注目される話題を摂取していった。民俗学は、社会史や文化史と問題を共有することで、お互いの存在理由を補完しあうこともあった。さらにこれらの作業は、すでに見たように自治体史の編纂、国の委託事業、さらには文化財行政が地域社会で活発化していく中で定着していった。歴史学はもちろん、民俗学プロパーたちも市町村史の編纂室や教育委員会に籍を得たり、場合によっては地方の博物館の学芸員のポジションを得ることも盛んになっていったのである。

(8)——少し異色なところでは、『関口日記』の中に登場する菓子類についての定量的な検証も行われている[江後・吉川1990]。

(9)——例えば山本光正は、近世の道中日記を中心的な資料として、当時の交通の発達と旅の位置付け、移動をめぐる社会的背景などについて広範な議論を行なっている[山本光正 2010]。また、櫻井邦夫や岩鼻通明は東北地方での事例を中心に参詣に至る旅の記録を検証している[岩鼻1987, 桜井1986]。また、小野寺淳は、伊勢参宮の道中日記を中心に検証を進めている[小野寺1990]。

テーマとして経済史からは、旅の講組織と参詣経費の問題が扱われ、交通史からは各々の旅のルートとその変化、関所の通行に関わる諸制度の問題が探求された。また、歴史地理学でも多様なルートの地理的環境や、人びとが旅先で出会った風物や景観に関わる記述にも関心が持たれている。この他にも紀行文学としての道中日記の意義、当時の旅に出た女性をめぐる諸事情や彼女たちの社会的な立場にも関心がもたれている。これらの分野では、当時の人々の旅の経験や往来の軌跡だけでなく、そこ

で彼らが見聞した景観への意識のあり方なども焦点化してきた。1980年代の初頭に本格化したこれらの研究は、多くの資料の蓄積とともに広く展開していくことになった。民俗学に近い西海や山本の成果も、これらの研究史の上に成り立っていることは間違いないだろう。

(10)——おそらくこのような議論の延長には、「定性的」な資料と「定量的」な資料の比較検討をめぐる論争を位置づけることもできるだろう〔山下2006〕。ただし定性と定量を対立軸とする視座そのものを問い直す必要があるのかもしれない。

(11)——近代以後の日記の多くは、博文館を始めとする印刷媒体が出版した「日記帳」に記されたものが多い。ここには予め1日ごと記載欄が設けられ、日付や曜日、天気といった定型的な記録を記す欄が刷り込まれている。このような書記を規定する印刷物の影響とそれによって主体化される個人意識の問題が、この小川の議論に潜在していたとも言える。実際、安室が紹介した農事日記にも労働時間などを記載する欄があり、彼はそれを一覧化することで定量的なデータを可能にしたのである〔安室2012〕。なお、このような日記帳のスタイル自体にも、専門的な関心が向けられていることも付記しておく〔田中・土屋・阿曾2013〕。

(12)——そもそも定量化とは何かという問題が提起されてもいるが、その問題には踏み込まない。

(13)——声や口承の地平を改めて課題として議論は、すでに多くの研究者によって提起されている〔重信1989, 1999, 小池2011〕。これらの立場を含み込んだ議論は、稿を改めて行いたい。

(14)——実際のところはわからないが、これは資料をめぐる研究分野間による共同作業、というより分業の弊害かもしれない。軍隊や教育、あるいは医療といった分野には、近・現代史の中に各々の専門領域がある。その分野の研究者がプロジェクトに参加している場合には、民俗学者は一定以上の言及を避けることになる。餅は餅屋というわけである。しかし、日記にこのような話題が頻出しているとするなら、それらの事例を忌避することは決して、資料を十全に理解することにはならないだろう。

(15)——ナショナリズムと民俗の問題は、今日ではむしろ、ポピュラーなテーマと言えるだろう。岩本通弥をはじめとする多くの研究者が、各々異なった視点やテーマからこの問題に取り組んでいる〔川村1997, 岩本編2007〕。また、近代化した農業の問題、農村が抱える課題についても山下裕作や和田健といった研究者がプロブレマティックな議論〔山下2008, 和田2012〕を行なっている。

参考文献

- 秋山笑子 2011「水辺の環境と生活の変容—手賀沼のほとりで農に生きた人:増田実日記から」『地方史研究協議会編『北総地域の水辺と台地—生活空間の歴史の変容—』雄山閣
- 秋山笑子 2014「海付きの低湿地における生業形態の変化と分業について—浦安のハマとオカー」『総研大文化科学研究』10, pp.111-136
- 石川松太郎・直江広治編 1977『武士の子・庶民の子（日本子どもの歴史, 3-4）』第一法規出版
- 井上攻・佐藤広・永島政彦・増田昭子・安室知 2013「座談会 テーマ「日記」」『民具マンスリー』46(7) 神奈川大学日本常民文化研究所編, pp.1-24
- 岩鼻通明 1987「道中記にみる出羽三山参詣の旅」『歴史地理学』139, pp.1-14
- 岩本通弥編 2007『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館
- 梅野光興 2012「『真覚寺日記』にみる疫病と呪術」『国立歴史民俗博物館研究報告』174, pp.271-290
- 江後迪子・吉川誠次 1990「江戸末期の菓子普及状況（第1報）—関口日記にみえる菓子について—」『別府大学短期大学部紀要』10, pp.29-36
- 太田秀保 1999「城下町の子どもたち研究序説—日記等記録からみた子どもたちの存在状況—」『信濃〔第3次〕』51(5), pp.289-302
- 大場 修・神尾沙和 2009「日記から読む近代民家の普請過程：京都市久多地区の土堅家を事例として」『日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系』49, pp.881-884
- 小川直之 1996a「日記と伝承」『農耕習俗と農具 昼間家日記を中心に』『歴史民俗論ノート—地蔵・斬首・日記—』岩田書院, pp.45-58
- 小川直之 1996b「神崎守三郎日記について」『歴史民俗論ノート—地蔵・斬首・日記—』岩田書院, pp.59-94
- 小野寺 淳 1990「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷 —関東地方からの場合—」『筑波大学人文地理学研究』14, pp.231-255

-
- 尾崎行也 2000 「近世前期上田領の女たち一問屋日記にみるその様相一」『信濃〔第3次〕』52(8), pp.536-544
- 小沢朝江・長田城治 2011 「武蔵国橋樹郡生麦村『関口日記』にみる古家利用の実態」『学術講演梗概集・F-2, 建築歴史・意匠 2011』, pp.509-510
- 小沢朝江・長田城治 2013 「武蔵国橋樹郡生麦村『関口日記』にみる建築職人の分業と就業実態」『学術講演梗概集 2013 (建築歴史・意匠)』, pp.293-294
- 春田直紀 2012 「クリーク農村の自然災害と生業戦略:『野口家日記』(一八四七-六五)を素材に」『日本史研究(特集 歴史に見る防災・減災・復興)』(597), pp.52-79
- 川口 洋 2010 「近代移行期における天然痘による疾病災害研究の課題」『人文地理学会大会 研究発表要旨』(0), pp.8-11
- 川島秀一 2014 「追尾士の捕鯨記録—北海道網走市, 昭和46~47年の小型沿岸捕鯨」『国立歴史民俗博物館研究報告』181, pp.133-146
- 川島秀一 2015 『安さんのカツオ漁』富山房インターナショナル
- 河野淳一郎 1984 「『公私日記』にみる幕末期名主の妻」『多摩のあゆみ』37, pp.15-27
- 川村邦光 1997 「幻視する近代空間 迷信・病気・座敷牢, あるいは歴史の記憶」
- 北原糸子 2002 「歴史災害にみる不安のかたち—安政南海地震(1854)の日記から」『学際』7, pp.9-15
- 北原糸子 2007 「近世の日記に見る旅と災害—19世紀庶民の旅日記『虎勢道中記』を中心に—」年報人類文化研究のための非文字資料の体系化4 神奈川大学二一世紀COEプログラム研究推進会, pp.75-92
- 小池淳一 1989 「言語・伝承・歴史—日本民俗学の個人認識—」『族』10, pp.20-31
- 小池淳一 1990 「沈黙の意味」『族』12, pp.43-49
- 小池淳一 1993 「民俗研究の認識論」『民俗学評論』29, pp.57-67
- 小池淳一 2011 「口承文芸研究の一視点—その歴史性に着目して—」『國學院大學紀要』49, pp.43-59
- 小嶋秀夫 1986 「桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1)」『名古屋大学教育学部紀要・教育心理学科』33, pp.1-24
- 小嶋秀夫 1987 「桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(2)」『名古屋大学教育学部紀要・教育心理学科』34, pp.189-217
- 小林健彦 2013 「慶長年間に於ける謎の災害:文化論としての震災への対処」『新潟産業大学経済学部紀要』41, pp.17-48
- 小松芳郎 1992 「農業日記にみる秋山郷の生活—昭和七年の山田家の場合—」『信濃』44-1, pp.38-52
- 小松芳郎 1994 『長野県の農業日記 明治・大正・昭和の記録』郷土出版社
- 桜井邦夫 1986 「近世における東北地方からの旅」『駒沢史学』34, pp.144-181
- 櫻井美代子 2004 「日記にみる幕末豪農の食生活—筑前国宗像郡吉田家家事日記帳を通して—」『東京家政学院大学紀要 人文・社会科学系』44, pp.85-90
- 櫻井美代子 2007 「明治後期京都のある商家の食生活—ある商家の若妻日記を中心に—」『東京家政学院大学紀要』47, pp.31-39
- 佐藤誠朗 1994 『幕末維新の民衆世界』岩波書店
- 重信幸彦 1989 「世間話」再考—方法としての「世間話」へ—『日本民俗学』180, pp.1-35
- 重信幸彦 1999 『タクシー/モダン東京民俗誌』日本エディタースクール出版部
- 島崎とみ子 2007 「近世後期の京都商家のくらしと食—人生儀礼出生を例に—」『会誌食文化研究』3, pp.66-76
- 島崎とみ子 2009 「京都商家のくらしと食—一年中行事を例に—」『日本調理科学会誌』42(4), pp.30-40
- 高橋千鶴子 1983 「『公私日記』の講と錦町の念仏講」『多摩のあゆみ』32, pp.23-27
- 滝沢 博 1978 「江戸時代庶民の旅—「伊勢道中日記」より」『多摩のあゆみ』12, pp.40-43
- 田中祐介・土屋宗一・阿曾歩 2013 「近代日本の日記帳—故福田秀一氏蒐集の日記資料コレクションより—」『アジア文化研究』39, pp.237-272
- 高木俊輔 2013 『近世農民日記の研究』塙書房
- 高桑守史 1994 『日本漁民社会論考—民俗学的研究』未来社
- 高田知和 1998 「農村青年の自己教育活動—農民日記にみられるその一端」『ヒューマンサイエンス』11(1), pp.45-54
- 高田知和 2003 「日記に描かれた農村社会生活—農村青年の日記を読む」『生活文化史』43, pp.82-94
- 高田知和 2007 「1945(昭和20)年—農村の日常生活世界—農村青年の日記を読む(1)」『応用社会学研究』17, pp.17-48
- 高田知和 2008 「「農業観」を歴史的に考える—農村青年の日記を読む(2)」『東京国際大学論叢・人文社会学部編』14, pp.17-56
- 高田知和 2009 「1930年代のむらの青年の就職活動—農村青年の日記を読む(3)」『東京国際大学論叢・人文社会学部編』15, pp.1-42
-

- 高田知和 2010 「日中戦争と農村の青年たち—農村青年の日記を読む (4)」『東京国際大学論叢・人文社会学部編』16, pp.43-106
- 高田知和 2014 「戦前戦中期農村青年の災害経験：農村青年の日記を読む (5)」『東京国際大学論叢・人文社会学部編』19, pp.73-93
- 立川市教育委員会編 1982 『公私日記』第17冊—第20冊 立川市教育委員会編
- 多仁照廣 2013 「日記と民俗—記憶と記録の相関—福井県美浜町菅浜井上久左衛門の聞き取りと日記—」『北陸の民俗』31, pp.27-31
- 谷本 潤 2014 「『旗本三嶋政養日記』にみる幕末期中級旗本の居住様態及び家政変遷に関する小考」『日本建築学会計画系論文集』79 (699), pp.1197-1203
- 千葉県立中央博物館編 2016 『千葉君津市一宿「星野日記」』千葉県立中央博物館
- 千葉徳爾 1990 「『人の生きかた』について」『日本民俗学』177, pp.1-37
- 時枝 務 2000 「日記史料と民俗—『大泉院日記』をめぐって—」『民俗と考古の世界—和田文夫先生頌寿記念献呈論文集—』pp.49-65
- 都丸九一 1988 「餅なし正月と雑煮」『日本民俗学』174, pp.74-83
- 豊原研究会編 1977 『善治日誌：山形県庄内平野における一農民の日誌 明治26-昭和9年』東京大学出版会
- 永島政彦 1996 「農業日記にみる畑作農家の生業」『群馬歴史民俗』17
- 永島政彦 1997 「『笛田武男日記』にみる山村住民の生業—昭和五十五年・利根村日向南郷」『ぐんま史料研究』9, pp.23-49
- 長田直子 2004 「近世後期における患者の医師選択『鈴木平九郎公私日記』を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』116, pp.317-341
- 中野紀和 2007 『小倉祇園太鼓の都市人類学—記憶・場所・身体—』古今書院
- 中村靖彦 1996 「日記が語る日本の農村—松本盆地の畑に八十年」中央公論社
- 西海賢二 1999 「歴史民俗資料学としての日記活用の可能性—資料紹介とその解題—」『民俗 (相模民俗学会)』169, pp.1-6
- 西海賢二 2014 『旅と祈りを読む—道中日記の世界—』臨川書店
- 西川祐子 2009 『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館
- 西田美昭 2001 「農民生活からみた二〇世紀日本社会—『西山光一日記』をてがかりに」『歴史学研究』755
- 西田美昭, 久保安夫編 1991 『西山光一日記 1925-1950』東京大学出版会
- 西田美昭, 久保安夫編 1998 『西山光—戦後日記 1951-1975』東京大学出版会
- 八王子市郷土資料館 1979-1993 『石川日記 (一)~(十五)』
- 林 圭史 2011 「大正期の鹿児島県におけるカツオ漁業の操業実態—1920年代の日記の内容分析をもとに」『地域漁業研究』51 (2), pp.45-68
- 林 淳 1996 「『指田日記』から見た村の陰陽師」『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』11, pp.19-32
- 林 淳 2004 「『指田日記』から見た村の陰陽師 (二)」『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』19, pp.1-18
- 久木幸男, 三田さゆり 1981 「19世紀前半江戸近郊農村における女子教育の一研究：武州生麦村『関口日記』から」『横浜国立大学教育紀要』21, pp.67-94
- 萩原ちとせ 1989 「近世日記にみる三浦半島の民俗—相州三浦郡大田和村—」『民俗 (相模民俗学会)』131, pp.3-7
- 比留間一郎 1984 「安政六年の多摩川洪水と両岸の日記」『多摩のあゆみ』36, pp.44-53
- 古川 彰 2005 「生活知のくり出し方—『村の日記』のなかの調査—」『先端社会研究』2, pp.237-267
- 福田アジオ 2016 『歴史と日本民俗学：課題と方法』吉川弘文館
- 増田淑美 1994 「鈴木平九郎日記に見る子供の病気」『江戸期おんな考』5, 東京桂の会編
- 松川由紀子 1976 「桑名日記・柏崎日記にみられる近世庶民の家庭教育について」『幼児の教育』75 (4), pp.42-51
- 宮崎 紘 1984 「めでたく初め—大正・昭和の一主婦の日記から—」『多摩のあゆみ』37, pp.62-67
- 安澤みね 1978 「幕末期・多摩農村の頼母子講」『多摩のあゆみ』12, pp.36-39
- 安室 知 1992 「『星野日記』にみる農民漁撈—明治19年~明治41年—」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学)』37, pp.55-70
- 安室 知 1995 「『昼間日記』にみる農民漁撈—明治43年~大正7年—」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学)』40, pp.19-33
- 安室 知 2012 『日本民俗生業論』慶友社
- 山下裕作 2006 「野にある経済」『日本民俗学』247, pp.15-37

-
- 山下裕作 2008 『実践の民俗学—現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」—』農山漁村文化協会
山田雄二 1996 「明治・大正期の世間づき合い—厚木市金田の「星野日記」に記された不祝儀のつき合い—」『民俗（相模民俗学会）』156, pp.5-8
山本志乃 2010 「市稼ぎの生活誌—農家日記にみる定期市出店者の生活戦略—」『日本民俗学』264, pp.1-30
山本光正 1997 「上総国望陀郡大谷村における加持・祈祷—雨乞・虫加持・疱瘡加持を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』70, pp.79-113
山本光正 2010 「旅行案内書の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』155, pp.109-136
湯川洋司 1997 『山の民俗誌』吉川弘文館
吉村利男・鈴木えりも 2016 「伊勢国一志郡堀之内村多賀家の日記—近世近代・4代の当主による—」『知多半島の歴史と現在』20, pp.175-200
和田 健 2012 『協業と社会の民俗学—協同労働慣行の現代民俗誌的研究—』学術出版会
和田正洲 1984 「近世文書と民俗作物帳を巡って」『郷土神奈川』15, pp.19-34
W.J. オング(林 真ほか訳) 1991 『声の文化と文字の文化』藤原書店

川村清志 (国立歴史民俗博物館研究部)

小池淳一 (国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年12月18日受付, 2018年8月3日審査終了)

The Development of Diary Research in Folkloristics and Its Potential

KAWAMURA Kiyoshi and KOIKE Jun'ichi

The aim of this report is to provide an overview of results of research based on diary resources in folkloristics and to reconsider its place. Several ways analysis of diary resources in folkloristics is effective have been pointed out. For example, diary resources are effective materials for reproducing folk culture of the past for which interviews are impossible to conduct. In particular, diaries which were recorded over a long period of time are considered important resources in investigating the sequential continuity and transformations of folk phenomena. Diary resources have also been called useful for quantitative data analysis which is quite difficult to discover from ordinary interviews.

It is true that much research has been done based on such prospects and a certain amount of results have been attained. However, a sweeping statement that the use of written sources including diaries has only benefited folkloristics would be untrue. Excessive dependence on written resources is likely to close off the search for culture passed down orally, which has been the role played by folkloristics, along with the cycle of searching in daily life, which is woven by folkloristics.

Thus, the writer's intent with this report is to readdress the relationship folkloristics has had with diary resources. This report investigates what kind of themes folklorists have extracted from diary resources, as well as what procedures were followed and what sort of developments such results caused in folkloristics.

Through such investigations, this report restructures the denotation of folkloristics and points out the potential for comprehensive analysis of vocal resources and written resources by expanding on the connoted potential of diary research itself.

Key words: diary resources, modern, folk culture, folk history, vocal culture